

ひとりじゃない

気仙沼市立小原木中学校 三年 和泉

もう僕の家はない」家族で笑った場所も弟とけんかした場所も跡形もなく、すべて流されてしまった。僕はあの日から、小原木中学校の体育館で生活することになった。

当時、周りの人たちが「家が流された」と言っても他人事のように思っていた。母が近くによってきて「〇〇、家なくなったから」と言った。何がわかかわからなかった。

何日か過ぎて、家を見にいった。哑然とした。自分の立っている場所すらわからないほど、がれきが散乱し、めちゃくちゃだった。自分の家がどの辺にあったかも見当がつかない。しばらく歩き、見渡すと、二階が数十メートル離れた田んぼに突き刺さっていた。一階はどこへいったか分からない。土台だけがむき出しになって、見るも無残だった。しかし、このとき、悲しいという感情は湧いてこなかった。

それから、長い体育館での生活が始まった。一日二食だけの共同生活。何不自由なく暮らしてきた僕には厳しい生活だった。腹が減って仕方なかった。食べるものがないので、近くに流れていた缶詰も食べた。生きることはいっぱいいっぱいだった。

その後、二次避難で僕の家族は市内にあるホテルに移った。ホテルに住めると心を躍らせた。しかし、僕を待っていたのは、さらに気持ち悪く苛立たせるものばかりだった。部屋一つに家族六人の生活。その頃はもう季節が変わり、暑さが増していた。クーラーも入らない。窓を開ければものすごい異臭が漂ってくる。まして、ホテルからの眺めは地獄絵図そのものだった。

あー、嫌だ。」だんだん卑屈になっていく自分がいた。けんかが増えた。理由は些細なこと。なのに腹が立って腹が立って仕方なか

った。なんで俺ばかりこんな思いをするんだ。」家がある人を恨めしく思い始めていた。「二人になりたい。」自分だけの時間がほしい。」と心から願った。

ある日、偶然、家族それぞれに用事があり、部屋で僕一人となった。念願の一人。この空間を自由に、自分だけの時間を使ってやる。うれしくてたまらなかった。自分の好きな音楽を大声で歌った。勉強もこんなに楽しいものとは思わなかった。そんな時間はあつという間に過ぎてしまった。母に一人の時間がとてもよかったことを伝えた。もつと自分だけの時間がほしいと頼んだ。僕を気遣った母は、そんな時間を何度かくれた。また、一人の時間がきた。今度は何をしようかとわくわくした。しかし、この日は、いつもと何かが違っていった。時が進まない。しだいに、訳のわからない不安に襲われてくる。音楽を聴いても勉強をしても落ち着かない。今までの一人の時間は、本物の自由でも、喜びでもなかったのでは？」そんなことを考えていると、ふと、父の言葉を思い出した。「こんな絶望を味わって、みんなで乗り越えたんだから、これより辛いことはないだろう。」僕は「ほっ」とした。今までの僕は、自分のことばかりを考えていたのではないか。みんな辛いはずなのに……。家族が僕を気遣っていたことにも気付けない自分がいた。この苦難を乗り越えたのは、あんなに心が折れそうになっても家族がいたから……。家族あつての自分だと気付いた瞬間でもあり、一人だと思いついていた自分に、家族の存在を、意識させてくれる言葉だった。

震災によって、いろいろなものを失ってしまったが、そのことによって、より、大切なものを得たような気がする。

僕は、今、はっきり言える、ひとりじゃない。